

令和5年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>キャリア・パスポート研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>自己理解を土台として、自己肯定感を高めるキャリア・パスポート —様々な視点から「今」の自分を見つめる活動を通して—</p>
<p>育成を 目指す 資質・能力</p>	<p>様々な視点から自己理解をしていくことで、自分の成長を主体的に求める力</p>
<p>研究内容</p>	<p>学習指導要領（平成 29 年告示）、特別活動の学級活動の内容の取扱いでは、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活の意欲につなげたり、将来の（在り方）生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童生徒が活動を記録し、蓄積する教材等を活用すること」と、小・中・高等学校に共通して、キャリア・パスポートの活用について明記され、2020 年 4 月からキャリア・パスポートが導入された。しかし、令和 5 年 4 月に本市のキャリア担当者で行ったアンケートでは、約 35%の学校が、「活用の仕方が分からない。」「使った効果が分からない。」と回答しており、キャリア・パスポートが十分に活用されていない現状がみられた。</p> <p>平成 30（2018）年度に内閣府が行った「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では、日本の若者は諸外国に比べて、「自分自身に満足している」と答えている割合がもっとも低く、自己肯定感が低いことが示されている。同様に、かわさき教育プラン第 3 期実施計画において、本市の小中学校ともに、自己肯定感が低い生徒がいる現状を挙げている。</p> <p>諸富祥彦（2000）は、自己肯定感とは、自分の良さを知り、ありのままの自分を受け入れ、自分のことが好きになること、そして、他者から認められたり、受け入れられたりすることにより育つと述べている。</p> <p>そこで、本研究会議では、様々な視点から「今」の自分を残すことで、その時だけでなく、これから先に自分を振り返ったときに成長や変容が記されているキャリア・パスポートを目指す。そのキャリア・パスポートが、児童・生徒が自己理解を深め、自己肯定感の高まりに繋げていく。梶田（1985）は、自己概念について「①自己の現状の認識と規定」「②自己への感情と評価」「③他者から見られていると思う自己」「④過去の自己についてのイメージ」「⑤自己の可能性・指向性のイメージ」の 5 つのカテゴリーに分けられると述べている。そこで梶田の示す自己概念についての 5 つのカテゴリーを、自己理解の視点に置き換え、キャリア・パスポートに挟むプリントの共通の視点として、A 今までの自分（カテゴリー①④）、B 他者から見た自分（カテゴリー③）、C 未来への自分（カテゴリー⑤）の 3 つを入れることにした。</p> <p>その手立てとして、キャリア・パスポートを記入する前に、日常生活や今までのキャリア・パスポートを見返す時間を確保した。取組に対して、他者からの肯定的なコメントをもらったり、身に付けた力を日々の生活や将来にどう生かすかを考える時間を取り入れたりする。</p> <p>児童生徒が、キャリア・パスポートに挟む 1 枚 1 枚のプリントに、取り組んできたことに対して、自分自身や他者から価値づけされた「今」の自分の力がしっかりと蓄積されている。その蓄積されたキャリア・パスポートが自己理解を深め、自己肯定感の育成につながることを、事前事後のアンケート調査やプリントの記述、インタビュー調査から分析し検証していく。</p>